

主 題：教会の建て方

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章9－15節

ちょうど、新しく生まれた子どもたちが毎日少しずつ必ず成長して行くのと同じように、新しく信仰をもったクリスチャン一人ひとり日々成長して行く者です。もし、聖霊によって確かに新しいのちがその人のうちに植つけられたなら、その人は必ずみことばを学び、それによって養われて行くにつれ、霊的に成熟した人物へと成長して行きます。このことは単に肉体的な幼子たちや、また、救いを得た新しい信徒一人ひとりに適用されるだけでなく、実は、教会においても同じことが言えるのです。教会が新しく建てられたとき、開拓されて新しい教会が生まれたときに、そこには幼子である教会が存在します。そこに集まっているクリスチャンたちはみな、新しく信仰をもった幼い人たちばかりだからです。けれども、教会を構成する一人ひとりのクリスチャンたちが、日々成長して行くにつれ、その集まりである教会も、同じように、成熟した教会へと変わって行きます。

このことは新約聖書を見ると、私たちは一つのパターンとして見受けることができます。宣教師によって教会が建てられた時に、その宣教師は教会が成熟するまでそこに留まり、そこでその教会を教え導きます。教会の中の人たちが少しずつ成熟し成長し、そして、その教会を導くことが出来る長老たちへと成長して行くときに、宣教師はその長老たちに働きを託し、別のところへと旅立って行きます。そして、残された長老たちは教会の者たちに教えることが出来る者たちを訓練し、次の世代へとその働きをバトンタッチして行くのです。パウロはまさにそのような働きをしていました。彼は宣教旅行で様々な教会を建て、それぞれの地であって働きを為し、その教会を離れるに当たってそれぞれの場所で長老たちを任命しました。そして、そこで立てられた長老たちは次の世代の信徒たちを弟子とし、訓練し、教会をより成熟したものへと置いていったのです。

この働きは、実は、教会が始まったときから今も変わらずに起こっていることです。そして、実に、2000年経った今、私たちの教会もその働きの中にあるのです。けれども、残念ながら、ときに教会の中には思ったように成長しない教会があります。しっかりと日々成熟度を増して行くのではなく、むしろ、いつまで経っても幼子のままで居続ける教会も存在するのです。その典型的な例がコリントの教会でした。パウロはこの教会を心から愛していました。パウロは宣教旅行の中であって、コリントの町にやって来て教会を建て上げました。彼はこの教会を愛するがゆえに、多くの心遣いを為し、ケアをし続けました。そして、実に多くの時に、この教会のために彼は涙を流しました。彼はこの教会を愛していたのです。けれども、残念ながら、この教会はパウロが願うようには成熟して行きませんでした。人々は成長するのではなく、むしろ霊的な赤子のままで居続けました。そして、それゆえに、この教会には多くの問題が満ちていました。それらの問題の中であって特に大きな問題の一つは、この教会の中に存在していた「分裂」です。ある人たちは「私はパウロにつく」と言い、ある人たちは「私はアポロにつく」と言い、また、別の人たちは「私はペテロにつく」と言う、そのような一人ひとりのクリスチャンたちが集まって何人かのリーダーたちを頭にして、自分は彼に属するなどという話をしていたのです。そして、そこには争いが起こりました。そこには問題が起こっていたのです。

この問題に関して、パウロはこの手紙の前半部分1章10節から4章21節に至るまで、問題の解決、その問題を指摘してそれを修正するために必要な事柄を書き続けて来ました。その中でパウロは、人々が教会にあってどのようにクリスチャンのリーダーたち、教会のリーダーたちを見るべきか、捉えるべきかということを一生涯懸命教えて来ました。なぜなら、このコリントの教会の中であって、信徒たちは自分たちのリーダー、教会のリーダーたちを誤解していたからです。彼らがまるで自分たちのアイドル、自分たちの象徴だとして、その人につくことがすばらしいことではないかと、そのようなことを考えながら生きていたのです。だから、分裂が起こったのです。だから、人々は「私はパウロにつく」、「私はアポロにつく」と言っていたのです。

今日、皆さんといっしょに見て行く箇所はこの文脈の中で見出すことが出来る箇所です。パウロがコリントの人たちに対して、信徒たちは教会のリーダーたちをどのように捉えるべきかということを見せて行く過程の中で、非常に分かり易い二つのたとえを使います。そのことがIコリント3：6－15に記されています。6－9節は畑、農園、農業のたとえです。そして、10－15節は建物、いわゆる、建築現場でのたとえです。今朝はパウロの上げるこの二番目のたとえを学んで行きます。ここには先ほどから話しているように、確かに、教会の人たちがどのように教会のリーダーたちを理解するべきなのかということが教えられているのですが、実は、皆さんといっしょに見たいのは、そのこと以上に、こ

ここでパウロが私たちに教えること、「どのように神が喜ばれる教会を建てるのか」というその方法に関してです。ここでパウロは非常に重要なレッスンを私たちに与えてくれています。教会を建てるに当たって、私たちがどのようにその教会を建て上げるべきか、そのことをパウロはここで私たちに教えてくれているのです。それを今日、皆さんといっしょに見て行きたいと思います。そのことは今、私たちの教会、この浜寺聖書教会にあって、非常に大切なタイムリーなトピック、学びであると思います。なぜなら、私たちは今、聖書的な教会としてその姿を変えて行こうとしているからです。より聖書的な教会として神に喜ばれる教会になって行こうとしているからです。そうするに当たって、私たちはどのような教会を建てなければいけないのでしょうか？そして、それだけではありません。特に、この箇所は私にとっても個人的に非常に重要な箇所です。なぜなら、私に教会のリーダーがどのような役割を担うのか、何をしなければならないのかをはっきりと教えているからです。そこに書かれている内容は、正直、非常に恐ろしいものです。けれども、この箇所を見て行くことを通して、いったい、どうすれば私たちが神に喜ばれる、神の栄光を現わす教会を建てるのが出来るのかを考えて行きたいと思うのです。

ひょっとすると、幾つかの事柄は皆さんに直接的に適用しないかもしれませんが。けれども、願わくは、この学び、このメッセージが終わって皆さんがお帰りになるとき、聖書は皆さん一人ひとりがどのように教会を建てなさいと教えているのか、そのことを皆さんがしっかりと知るだけでなく、皆さん自身がこの教会を建てる働きに参加するという、その思いをもっていただきたいと心から願っています。

パウロはこのように記しています。Iコリント3：9-15 **【私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。：10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。：11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。：12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、：13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。：14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。：15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。】**

この箇所は非常に多くのことが教えられています。この箇所をこのわずかな礼拝の時間にすべて十分に話すことは困難です。それゆえに、今日はそのことをしませんが、どのように教会を建てるのかという、そのことに焦点を当てて行きます。クリスチャン生活の長い皆さんは、この箇所は必ず一度は聞かれたことがあるでしょう。「**金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、**」と、けれども、実は、多くのすばらしい注解者たちが同意していることは、新約聖書の中でこの箇所ほど間違っていて理解されているところは少ないということです。これまで一般的にどのように理解されて来たのでしょうか？実は、ローマカトリック教会においてこの箇所は「煉獄」という教理をサポートする唯一の新約聖書の箇所だと言われています。「煉獄」というのは、死んだ後、人がそこに行って自分の罪の支払いをして、火で焼かれて通された後に天国に行くことができるというそのような概念です。かなり複雑な教理を割愛しましたが、つまり、そういうことです。ちなみに、この箇所はそのようなことは一切教えていません。別の人たちは、私たちが属する福音派と言われる人たちの中に多く見られる傾向ですが、その人たちは特に3章の前半部分から始まるこの話の流れの中で、この箇所は、実は、信仰を告白しながらも世的な生き方をするクリスチャンたちのことを話しているという理解をします。パウロはそのような話をしていません。また、別の人たちは、ひょっとするとこれが皆さんが一番多く聞いたことがあることかもしれませんが、これらの「**金、銀、宝石、木、草、わら**」というの、一人ひとりのクリスチャンがその信仰の歩みの中にあって為して行く働き、行ない、生き方のことであって、一人ひとりのクリスチャンが主の日に主の御座、主の前にあつてさばきを受けるときに、どのような生き方をしたのかを吟味されるそのことであると言います。パウロはそのようなことも言っていない。これは一人ひとりのクリスチャンのことではないのです。この箇所は最初に言ったように、教会のリーダーたちがパウロが建てた土台の上に、しっかりと教会を建てるか建てないかということを行っているのです。

パウロは、神の働き人たちが自分たちの主人である主の前にあつて、どのようにその働きを評価されるのかということをお話しているのです。そして、ここで私たちは、主の働き人たち、教会のリーダーたちがどのように教会を建てなければいけないのか、その方法を学んで行くのです。いったい、どのようにして私たちは教会を建てるべきなのでしょう？

☆どのように教会を建て上げて行くのか

A. 正しいプロセスによって建てる 10節

最初にパウロが私たちに教えることは、私たちは教会を建てるのに当たって正しいプロセスをもって建てるべきなのではないかということです。正しい過程を通らなければいけないのです。10節を見ると「与

えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。」とあります。

1) 私たちは神の助けがなければ働きを為すことはできない

パウロが正しい過程を通して教会を建てなければいけないと言ったその最初の部分で私たちに教えることは、私たちは神の助け、神の力によらなければ仕事をする事ができないということです。あらゆることの前に私たちに必要なことは「神の助け」です。パウロは言いました。「**与えられた神の恵みによって**」と。ちょうど、パウロが6-9節でたとえを用いて話をしているように、確かに、パウロはここで、「私がコリントの教会の土台を据えたのです。」と述べています。そのように大胆に宣言しています。だからといって、パウロはここで「私はあなたにとって特別な存在でしょう」とは言っていないのです。パウロがなぜそのような働きをしたのか、なぜ、土台を据えることができたのか、なぜ、コリントの教会という畑をそこに作る事が出来たのか、「それは神の恵みが私に与えられたからだ。」と言うのです。何よりも素晴らしいのは、パウロの能力でも知恵でも人格でも教育でもありません。神の恵みがパウロに与えられることなのです。神から与えられる賜物がなければだれ一人として教会を建てることはできません。それゆえに、働き人がだれであろうと、彼らがどのような働きをしても、彼らはいっさい誇ることはできないのです。なぜなら、彼らがその働きする事が出来た唯一の理由は、神にあったからです。だから、彼らが誇る事ができるのは神だけだったのです。そして、人々はそのことを良く理解しなければいけなかったし、そのことをよく理解すれば「私はパウロにつく、私はアポロにつく」などとは言わなかったはずで、「私は神のすばらしさを称える」と言えたのです。

教会を建てるに当たって、私たちは間違いなくここから始めなければいけません。神が素晴らしい恵みを与えていないのに、神のために働きを始めることはできないのです。別の言い方をすれば、未信者は教会を建てることはできません。神の救いを受けていない人たち、神の恵みがない人たちは、教会を建てられないではないですか。また、教会のリーダーとして働いて行くためには、特に、長老として教会の責任をもって働いて行くためには、様々な条件がありました。そこには明らかに賜物に言及するものがあるのです。パウロは言います。「神の恵みによって初めて私たちは教会を建てる事が出来るようになる。その恵みがなければ、私たちは働きを始める事ができない。」と。ちなみに皆さん、皆さんにはすでに神からの恵みが与えられています。聖霊が与えられているではないですか。聖霊の働きのゆえに、皆さんのうちには聖霊の賜物があって、皆さん一人ひとり教会を建て上げるに当たって、必要な働きを担っているはずで、だから、皆さんにはできるのです。その働きを熱心に行かなければいけません。

どのようなプロセスがあるのか？最初に、神の恵みが与えられている、神の力が与えられているから神の助けがなければならぬのです。

2) 私たちは他の人がともに働かなければ働きを為すことはできない

私たちに他の人たちの助けが必要なのです。パウロは言います。「**与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。**」と。よく考えてみてください。パウロは土台を据えましたが、土台だけで建物になりますか？土台だけで完成しましたか？完成していません。土台の上に建物が建てられる必要があるのです。ということは、私は土台を据えたけれど、あなたがたがその上に建てなければ建物にならないとパウロは言っているのです。私にはあなたがたの働きが必要だと。それこそがまさに教会を建てるためのプロセスです。土台が据えられなければならない、そして、その上に建物が建てられなければいけないのです。

コリントの人たちはこのことを良く理解していました。どのように理解していたのか？私たちにもはっきりと分かっています。なぜなら、当時は今の建築現場にあるようなたくさんの機械がなかったのです。今どれ程大きな建物を建てたとしても、普通の建物ならせいぜい1年位です。非常に大きな建物でも、10年、15年、20年位経てば出来た。でも、当時の人たちはそうではありませんでした。もし、人々が神殿のような非常に大切な建物を建てようとするなら、その建物の建築のプロジェクトは何世代にも亘って続きました。覚えていますか？ヘロデの神殿は改修にどれ程の年月が掛かりましたか？90~100年も掛かっているのです。当時の建築プロジェクトはそれ程長い年月が掛かるものだったのです。パウロは「私は土台を据えました。私の後に続く人たちがその建物を建てて行かなければいけない。それも一世代で終わる訳ではない、二世代、三世代、もっと長い世代に亘って、この神の教会は私が据えた土台の上に建てられて行く」とそのように言うのです。

最初の働きを始めた人たちはもうすでに死んでしまったかもしれません。でも、建てた土台に沿って建物が建て上げられて行きます。このような壮大な計画であるゆえに、何世代もの働き人が必要な大きな建築計画であるゆえに、一人の働き人だけが優れている訳ではありません。みなが同じ目標に沿って、みな同じ計画に基づいてその働きの一端を担っているのです。では、どうしてコリントの人たちは私はパウロの方がすごいと思う、アポロの方がすごいと思うと言うのでしょうか？パウロは言います。「そのよ

うなことは関係ないでしょう。教会は神によって助けられている人たちが、何世代にも亘って、土台の上にはしっかりと建物を建てて行くことだ。」と。

私たちがその土台の上に建てて行こうとしているのです。この教会は60年の歴史があります。教会が始まってから多くの人たちがこの教会を建てるための働きをして来ました。ある人たちはもうすでに天にいます。ある人たちはまだきっと幼い子どもたちです。でも、この働きは継続して行くのです。

3) 私たちは注意深くなければならぬ

三番目はプロセスというよりも「警告」と言った方が良いかもしれません。パウロが言うことは、私たちがこの働きを為して行くためには、注意深く計画に目を留めていなければいけないということです。注意深く計画に目を留めなければ仕事が出来ないのです。「**与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。**」、それぞれが注意しなければいけないのです。実は、パウロはここでもこの前の箇所でも、「**建てています**」とか「**建てる**」ということばを使っていますが、これらは現在形の動詞が使われているのです。つまり、今現在、パウロがこの手紙を書いている時点で、教会を建てている教会のリーダーたちに話をしているのです。皆さんよく考えてみてください。9節にはこのように記されていました。「**私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。**」と。パウロたちが神の協力者で畑に種を蒔き水をやったのです。パウロたちが土台を置き、パウロたちが教会を建てていたのです。だれが神の畑で神の建物ですか？教会のメンバー一人ひとりです。「**あなたがたが神の建物**」と言われていたのではないですか。だから、ここで言われているのは一人ひとりのことではありません。個人々々のことではなく、教会という信徒の集まりを建てている人たちに対してパウロは話をしているのです。明らかにそうです。だから、私たちはその文脈の中でこのことばを捉えなければいけません。パウロが言っていることは、今現在、進行形で建物を建てている教会のリーダーの皆さんと言っているのです。ちなみに、このことは今の私たちにも同じように適用します。パウロは私たちに対して言うのです。今現在、進行形で教会のリーダーとして教会を建てる責任のあるあなた、「**あなたはどのように建てるのかを注意しなければいけません**」と。

どのように建てるのでしょうか？注意しなければいけません。このプロセスをしっかりと守らなければいけません。私たちは神の恵みによってこの働きをすることが出来るようになり、私たちは一人だけでそれをすることが出来る訳ではない、何世代にも亘ってこの働きをするために、その準備を整えていなければいけないのです。それを継続して行かなければいけないし、まして、世代が変わって行けば行くほど、私たちはオリジナルのプランに基づいてしっかりと建てて行かなければいけない、その過程を通らなければいけないと言うのです。それがパウロが一番目に私たちに教えることです。どのように教会を建てるのか？正しいプロセスに沿って教会を建てなさいと。

B. 正しい土台の上に教会を建てる 11節

二番目にパウロが教えることは「正しい土台の上に教会を建てる」ということです。どのような教会を建てるべきでしょうか？いったい私たちは何に注意しなければいけないのでしょうか？最も明らかなどころからパウロは始めます。そこから私たちが始めたいと思います。パウロはここで私たちがどのように教会を建てて行くのかを教えます。神の神殿として、神の建物としてこの教会を建て上げるという壮大なプロジェクトを始めるに当たって、その建築に携わる者たちに対して、どのようにこの建物を建てるべきかを教えます。

1) しっかりした土台

初めにパウロが言うことは「土台」です。土台がしっかりしていなければその建物が安定が生まれることはありません。土台がしっかりしていなければ、しっかりとした基礎に建物が建てられなければ、その建物はあっという間に崩れてしまいます。それゆえに、私たちはみな土台が大切なことを知っているし、パウロもそこから始めるようにと言うのです。10節には「**私は賢い建築家のように、土台を据えました。**」とあります。パウロはここでもうすでに彼が為した働き — 土台を据える — について言及しています。そこでその働きをした自分のことをパウロは「**賢い建築家のように**」と言っています。原文ではこの「**建築家**」と訳されていることばは「アーキテクトン」ということばです。少し英語をご存じの皆さんは、このことばと似た英単語を思い浮かべることが出来ると思います。それは「アーキテクト」ということばです。「建築家」という意味です。まさに、ここで訳されている通りです。「賢い建築家」、このアーキテクトンということばは、当時、特に技術的に優れた働き人に対して使われていたことばで、このアーキテクトンと呼ばれる人物は、全建築プロジェクトの総責任者としての働きを託されている人物であった言われます。パウロは自分が「賢い建築家」であった、賢いアーキテクトンであったと、そのように言うのです。パウロはそのような者として注意深く土台を据えたと言うのです。その上に建物がしっかりと建て上げられるように。

今の時代にあっても、そして、当時においても、まさに、この土台がどういうものであるかは非常に大切な事柄でした。土台の石は注意深く削り取られ、細心の注意を払ってしっかりと測定され、厳密にその石は並べられました。そして、その上に載るあらゆる石、建物の素材は、その土台に沿って建てられていたのです。それゆえに、土台が曲がっていると建物は曲がります。土台にズレがあると建物もずれて行きます。パウロは賢いこの働きに非常に長けたすばらしい建築家としてこの土台を据えたのだと、そのように私たちに教えるのです。

2) 教会の唯一真の土台はイエス・キリスト

そして、11節でパウロはさらにこのことについて説明します。パウロが据えた土台について彼はこのように言います。「**というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。**」、ここでパウロはだれかほかの人がやって来て、教会を建てるに当たって、イエス・キリスト以外の土台の上に教会を建てるのが出来るのか出来ないのかということを行っているではありません。もし、だれかが教会を建てるという働きをしようとして、その人が「イエス・キリスト以外の土台の上に教会を建てることは不可能ですか？」と聞かれるなら、それに対して「可能ですよ」と答えることができるということです。キリスト教の歴史を見た時に、多くの人たちがイエス・キリスト以外の土台の上に教会と名のつくものを建てて来たではないですか？今のこの時代にも、そのような教会と呼ばれるものがたくさん存在します。しかし、パウロが言っていることは、もし、その教会と呼ばれるものがイエス・キリストという土台の上に建てられていないなら、実は、それは教会ではありませんということです。本当に教会が教会であるためには、唯一、イエス・キリストという土台の上に建てられていなければいけないと言うのです。

教会の中心となるもの、それはまさに土台です。ここで言われていることは、教会が教会としてあるためにすべての物をつないでいる中心点です。「イエス・キリストはすべてのクリスチャン生活、信仰、そして、希望における土台だ。」とそのようにある注解者は言います。また、別の注解者は「キリストご自身すべて、また、彼の働きすべてが、永遠に私たちの前に建てられている確かな礎石である。」と、そのように表現しています。

皆さん覚えていますか？イエスが弟子たちに対して「私の教会をどのようなところに建てるのか」と、マタイの福音書16:18でイエスはこんなことを言われました。「**あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。**」と。皆さん、この「**岩**」が何か覚えていますか？ペテロではありません。ペテロの上に教会を建てるということと言われたのではではないのです。では、何の上に建てるのでしょうか？そのことはこの節の前16節にペテロが言った信仰告白の上に建てることとイエスは言われているのです。どのような告白でしたか？ペテロはイエスを見てこのように言うのです。「**あなたは、生ける神の子キリストです。**」と。この信仰告白のその岩の上に「わたしはわたしの教会を建てる。」と言われたのです。イエス・キリストが教会の土台なのです。イエス・キリストがこの教会の礎なのです。だから、パウロはコリントに行った時に、コリントの教会でこの土台を据えるに当たって、唯一、彼が関心をもっていたことは「イエス・キリスト」だったと言います。彼はこのことをこのように説明します。Iコリント2:2を見てください。「**なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。**」、パウロは「私はコリントにいてそこでいろいろな働きをしました。そこでは確かに多くの事が起こっていたし、いろいろな人たちに様々な知恵があったし、私の周りにはいろいろな事柄が存在していた。けれども、私が唯一関心をもって唯一熱心に行っていたことはイエス・キリスト、すなわち、十字架にかかったこの方を知り、この方を宣べ伝えること以外の何ものもなかった。」と言うのです。

パウロはこの土台の上に教会を建てようとしていたのです。パウロが据えた土台はまさにイエス・キリストだったのです。聖書は非常に親切な本で、実に、私たちにこのような事柄について、さらなる説明を加えています。「**その土台とはイエス・キリストです。**」ということばを最もよく説明してくれる注解書が実は聖書の中に含まれています。

3) あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石

エペソ2章でパウロはさらに話を膨らませて説明しています。パウロはこのコリント人への手紙を書いてから数年後にこのエペソ人への手紙を記しました。そこでパウロは幾つかの別のたとえを用いながら教会を説明して行く流れの中で、「**土台**」ということばを再び使っています。エペソ2:19-20「**こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は使徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。**」、あなたがたはどの土台の上に建てられているのですか？パウロは言います。「**あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。**」、これはどういう意味なのでしょう？「**使徒と預言者という土台の上に建てられており**」とはどういうことなのでしょう？その説明がこの

文脈の中に出て来ます。3：5を見てください。「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」「使徒たちと預言者たち」が教会にあって何をしたのかということです。彼らがしたことは、今まで知らされなかった事柄、旧約聖書では教えられていなかったこと、明らかにされていなかった事柄を、教会の人たちに対して告げ知らせたことだと言うのです。

いったい、どの点で使徒と預言者たち、これは新約の預言者たちのことですが、彼らが教会の土台なのでしょう？それは彼らが神からの啓示を受け取って、その啓示を人々に告げ知らせるということによって、教会がどのように教会として立つべきなのかを明確にしたゆえに、彼らは土台なのです。別の言い方をすれば、使徒と預言者たちは新約聖書を書いたのです。彼らはクリスチャンとして神の前に生きて行くためにはどうすれば良いのかを私たちに告げたのです。その中心的な教え、いや、彼らが語ったありとあらゆることは一つのところへとつながっていました。イエス・キリストにつながっていたのです。イエス・キリストという人と、イエス・キリストが為したそのみわざにつながっていたのです。だから、パウロは言います。「土台は使徒と預言者たちだ。彼らが語った啓示である。でも、その礎石はイエス・キリストである。」と。私たちは「礎石」ということばを聞いても余りピンと来ないかもしれません。けれども、この当時の社会においてこの礎石は何よりも大切な建物の部分でした。最初に建物を建てるに当たって置かれた石が礎石です。そして、この礎石に基づいてありとあらゆる建物の部分が組み立てられて行くのです。礎石は土台以上に注意深く削り出され、正確に測られて、必要な場所に的確に置かれます。この礎石に基づいて他の土台となる石が並べられるのです。いわゆる、壁と壁がぶつかる点と言っても良いかもしれませんが、だから、よく「角の石」という言い方をします。壁と壁がどのように組み合わせられるのかを決めるのが礎石なのです。だから、もし、これがずれていたり狂っていたりすると建物には隙間が出来ます。ものすごく大きな隙間が出来ます。なぜなら、土台全体がその礎石に沿って並べられるからです。パウロは言います。「イエス・キリストがその礎石であり、その礎石に基づいて使徒と預言者たちは神からの啓示を教会のために据えた。」と。そして、その上に建物が建てて行くのです。それゆえに、この礎石はその上に立つ建物のすべてを測る究極の量りです。

皆さん、もし、私たちがイエス・キリストの教会を建てようと思うなら、私たちには土台は一つしかないのです。私たちにはイエス・キリストという土台しかないのです。そのイエス・キリストに基づいた神の啓示という土台しか私たちにはないのです。そして、もし、私たちがその土台以外の場所に建物を建てるとするならば、それは神の教会ではないのです。実に、この教会を建てるというプロジェクトは、長い間この礎石が置かれたときから今まで続いています。何百、何千、いや、何万という世代のクリスチャンたちが、クリスチャンのリーダーたちが、この教会を建てるという建築現場において熱心に働きを続けて来たのです。20世紀に渡って…。そして、今、私たちはここに浜寺聖書教会という建築現場をもっているのです。私たちはこの浜寺聖書教会という特定の場所であって、この神の建物を建てるその働きに携わっている一番新しい世代なのです。残念なことに、現代の多くのクリスチャンのリーダーたちは、新しい方法をもって教会を建てようとしています。事実、多くの人たちは古き良き設計図から離れて、より実践的なプログラムを用いることによって教会を建て上げようと躍起になっています。どうすればもっとより多くの人が集まるのか、そのことを念頭に置いて、人々が好むようなプログラムを提供することで教会が大きくなり、教会を建て上げることが出来るなどと考えるようになっています。でも皆さん、もし、私たちがそのような働きをするならば、私たちは神の教会を建てていないのです。なぜなら、神の教会を建てるためには私たちは一つの土台の上にはしか建てる事が出来ないからです。

イエス・キリストと彼に関する啓示、その土台以外に教会を建てる場所はありません。私たちはいくらでも好きなだけ建物を建てる事が出来ます。私たちはそれを教会と呼ぶ事が出来ます。私たちは出来るだけ多くの人たちを集めて「ここに教会があります」と言う事が出来ます。「何とすばらしい大きな教会でしょう！」と人々に誇ることが出来るかもしれません。また、私たちは人々に好かれる様々な事柄を行なって、人気を博して、教会だと言われる事が出来るかもしれません。でも、いいですか、もし、その教会が神のみことばを宣べ伝えることをしなければ、もし、その教会にいる人たちが神のみことばを聞くことがなければ、その教会は教会ではありません。もし、教会がイエス・キリストとその方に関する真理、十字架につけられた方を聞くことがなければ、それは教会ではないのです。

皆さん、浜寺聖書教会は教会ですか？浜寺聖書教会はイエス・キリストの土台の上に建っていますか？皆さんに是非願って欲しいところです。そうでなければいけないのです。

C. 正しい素材を使って建てること

建物の土台を今はっきりと見ました。土台ははっきりしています。土台はもう据えられているのです。皆さんが手にしているこの聖書にその土台があります。皆さんが救い主と信じているイエス・キリストが土台なのです。その上に皆さんはどのような建物を建てますか？どんな建物が建つべきですか？その

ことについてパウロは言います。パウロは私たちに警告しました。どのように建てるのか注意なさいと。その具体的な回答を私たちは12節から見るのです。「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、」とパウロは言います。

1) 素材について

どのような素材を使うのでしょうか？確かに、ここで私たちは「金」に始まって「わら」に至るまで順に価値が下がるその違いを見ることが出来ます。でも、パウロが言いたいのは、これら一つ一つの物が何かということではありません。そのことは文脈を見れば明らかです。パウロが言うことは、二つの大きなグループに分かれるということです。一つは「燃えないもの」、もう一つは「燃えるもの」です。ここには六つのものが上がっていますが、それぞれに具体的な意味を見出すのではなく、これらを二つのグループとして捉えるべきです。なぜなら、パウロがそのようにしているからです。

「金、銀、宝石、木、草、わら」、燃えるか燃えないかは単純です。これらの素材はすべて、当時、建物を建てる上で使われていたものでした。特に、重要な建物には石が使われていました。高価な大理石や石灰岩などが切り出されてそれが使われていたのです。ギリシャの遺跡などを思い浮かべていただくと、そのような石が今でも建っています。柱に使われたり壁に使われているのを見ます。それらがまさにこれです。そのような石は、多くの場合、金や銀で飾りどられていて、それが重要な建物には使われていたのです。また、一般的な建物、私たちが住むところやマーケットなどでは、木や草やわらなどを混ぜた粘土質のものが使われていたのです。そのようなもので建てられていたのです。確かに、これら一つ一つの物には明らかに価値の違いを見出します。でも、先ほどから話しているように、その価値の違いに具体的な問題があるのではなく、パウロが言わんとしているのは、この二つのグループ、燃える方と燃えない方が問題なのです。

13節を見ると、私たちはこのようなことを理解することが出来ます。「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」、火が来て燃やすということです。皆さん、最初に言ったように、この箇所について私たちが今までに聞いて来た解釈は、これは一人ひとりのクリスチャンの働きの真価を試すと理解するというものでした。でも、よく思い出してください。先ほども説明しましたが、9節で見たことは建物は教会、信徒一人ひとりでした。そして、だれかがこの土台の上にこのような素材を使って建物を建てているのです。そのだれかとはいはれませんか？パウロはずっと同じ人のことを話しています。それは教会のリーダーたちです。教会を建てる責任を担っている人たちです。教会という信徒の集まりがどのような建物になるのかを決める、教会を建てている働き人のことです。「各人」と言ったとき、「だれかが」ということばがここで何度も繰り返されますが、これはすべて教会の働き人、リーダーたちのことを話しているのです。そのリーダーたちがどのような建物を建てるのかが問題になっているのです、それが吟味されると言っているのです。

「金、銀、宝石、木、草、わら」、燃えるものと燃えないもの、なぜ、パウロはこのような例を上げているのでしょうか？当時のコリントの町に生活している人たちは、パウロの言っていることがよく分かりました。なぜなら、このコリントの町は、実は、紀元前146年にローマによって完全に焼き尽くされているからです。実に、約百年間、紀元前44年に当時の皇帝であったジュリアス・シーザーがこの町を復興させるまで、この町は炎によって焼かれた後、廃墟と化して何一つ残っていない町だったのです。興味深いのは、パウロがこの手紙を書いていたその当時も、実は、この紀元前44年に始まった建築工事の一部は、まだ実際に行なわれていたと言います。コリントの人たちはよく分かっていたのです。大切な建物を建てようと思ったら、燃えない素材で建てなければいけないということを知っていました。

2) 正しい素材とは？

では、いったい、これらの素材とは何でしょう？パウロは何を指してこのように言っているのでしょうか？そのことを私たちは文脈から理解することが出来ます。パウロは幾つかのはっきりした事柄を私たちに教えてくれます。

(a) 土台にふさわしい素材

これは論理的に考えれば分かることです。もし、教会の土台がイエス・キリストであるなら、その土台の上に建つ建物に使われる素材はどのようなものであるべきだと考えますか？その土台にふさわしいものだと思いますか？土台だけがっしりとして、その上に小さな建物が建てられたとするなら、皆さん、おかしいと思いませんか？もし、土台がイエス・キリストであるなら、その上に建てられる建物は、イエス・キリストとその真理にふさわしい建物でないといけませんか？

では、具体的にどのようなものなのでしょうか？そのことをパウロは4章に入ってから教えてくれます。前回、私たちはこの箇所を見ましたが、そこでもパウロは同じトピックの中で話をしているのです。教会の働き人たちがどのように吟味されるのかということをお話しました。私たちが今見ている3章の文脈

と同じ文脈です。パウロは言います。4：1－2を見てください。「**こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。：2 このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。**」、皆さん、忠実でない管理者が褒美を受けるとおもいますか？何の管理者なのですか？パウロは言いました。「**神の奥義の管理者**」と。つまり、パウロの言っていることは、教会を建てるに当たって、あなたはどのように神の啓示に対して誠実に働きをするのかが問われているということです。あなたは「**金や銀や宝石**」でそれを建てるのが出来るし、あなたはそれを「**木や草やわら**」にして建てることも出来る。つまり、教会のリーダーたちが吟味されるに当たって、建てる教会がどのようなものか、神に喜ばれるのか喜ばれないのか、その境目はどこにあるのでしょうか？神が与えてくださっている啓示に対して、どのように誠実であるのかによる、どのように忠実であるかによるのです。もう一つ加えるなら、4：5にこのようにあります。「**ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。**」、つまり、この働きをするに当たって、私たちはどのような動機でその働きをするのかということです。

皆さん、これが私たちがどのような素材を使って建てるのかに関連していることです。「**木や草やわら**」で建てる人たちは救われていない教師たち、教会を滅ぼそうとする教師たちでないことはこの文脈が明らかにします。なぜなら、主の前に立ったときに15節に「**その人は損害を受けませんが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。**」とあるからです。彼は滅ぼされることはないのです。確かに、彼は「**木や草やわら**」などで建てたけれども、彼が建てた場所はどこですか？イエス・キリストという土台の上に建てているからです。ですから、ここでパウロが言っていることは、救われていない偽教師のことではありません。16－17節に出て来ます。「**あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。：17 もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。…**」と、ここでははっきり言われていること「**だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。**」、これが偽教師たちです。でも、パウロがここで言っていることは、救われていて教会のリーダーとして立てられているながら、管理者として神の奥義に対して忠実に働きをしていない人たち、間違った動機でその働きをしようとしている人たちに対しての警告なのです。

私たちはどのように「**木や草やわら**」で教会を建てるようになるのでしょうか？例えば、このようなことです。燃え尽きてしまうような素材で教会を建てる教会のリーダーたちとはどういう人たちでしょうか？その人は様々なプッシャーに負けて、それが社会的なプレッシャーであったとしても、それが教会の中のプレッシャーであったとしても、経済的なプレッシャーであったとしても、人から来るプレッシャーであったとしても、そのようなプレッシャーに負けて、みことばを教えることをしなくなる人のことです。例えば、今、現代の世の中であって、女性が男性と同等に働きをすることは当然のこととされています。社会はそのように訴えます。教会のリーダーシップにおいて、女性が教会のリーダーとなることを聖書は容認していますか？パウロははっきりとそのことをしてはいけないと教えます。でも、多くの教会はいろいろな理由をつけて妥協します。経済的に苦しくなりました、どうしますか？様々な妥協をして、より多くの人々が教会に来るなら経済的に助かると思って、人々が来易い働きをするようになります。それだけではありません。私たちは「**木や草やわら**」で教会を建てるのが出来ます。例えば、礼拝の中でのみことばの優先度を低くしてしまいます。最近の教会では珍しいことではありません。メッセージの時間が10分に満たないこと、間違いなく、私がその教会でメッセージをしたら嫌われると思います…。優先度がどんどん下がるのです。難しい話をするのではなくて、軽い小話程度にして、残りの時間は神を称える賛美にしましよとか、ドラマを持って分かり易く説明しましよとか、または、メッセージをするに当たって、神が告げていることでなくて自分が言いたいことを皆さんに伝える、間違いなく「**わら**」で建てていませんか？教会のリーダーたちがみことばを語るに当たって、土曜の晩に一生懸命メッセージを作っているようでは、その次の朝に語られるメッセージは間違いなく「**わら**」のメッセージです。私は一度インターネットでこのようなメッセージを聞いたことがあります。そのさわりの部分を聞いたのですが、それは新年礼拝だったと思います。そのメッセンジャーはイントロダクションの中でこう言うのです。「大晦日の晩に私は準備をしていました。けれども、いつまで経っても夜になってもみことばの箇所が思い浮かびませんでした。いつの間にか私は寝てしまって朝起きると今日話すメッセージがまだ決まっていなかったのです。祈って一生懸命神さまに求めていたら、神さまがみことばの箇所を示してくださいました。ですから、今日私は皆さんといっしょにこのことをお証したいと思います」とメッセージが始まったのです。その時点で私はメッセージを聞くことを止めました。聞く必要がないからです。それは神が語ったメッセージを伝えようとしているのではなく、自分が思いついたメッセージを言おうとしているからです。もし、私たちが語るメッセージがそのようなメッセージであるなら、私たちは神の教会にいません。皆さんに心から願うのは、もし、この講壇からそのようなメッセー

ジが語られるなら、どうぞこの教会を去ってください。ここは神の教会ではないからです。

パウロはテモテに対してこのように言いました。「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。」。なぜ、この長老は「二重の尊敬を受ける」のですか？なぜ、それにふさわしいのですか？なぜなら、彼らは「金や銀や宝石」で教会を建て上げるための働きを熱心に行っているからです。教会のリーダーはこのようであればいけないのです。教会のリーダーはこのようなメッセージを語らなければいけないのです。ある日必ずテストの日がやって来ます。試される日がやって来るのです。私たちは教会のリーダーとして自分たちの建物をもって主の前に立つのです。そのときに、その建物が火がつけられます。あるときにそれは焼き尽くされてしまうものでしょう。ある人たちが持って来る建物はそうです。別の建物はそこに残り続けます。皆さんはどちらが良いですか？皆さんはどちらの建物にいたいですか？

ここでパウロは大切なことを幾つか教えてくれているのですが、14節に「その人は報いを受けます。」ということばがあって、15節には「損害を受けますが」とあります。良い建物を建てた人はその報酬を受けると言うのです。ところが、悪い建物を建てたために建物が焼けたとするなら、そこには損害が起こると言うのです。この「損害」ということばは、当時、建築の契約の中で使われていたことばの一つで、建築に携わっている作業員たちが、その建物を損壊した場合に、その報酬から報いが取られる、報酬が減ってしまうという、そのことに関して話をするときに使われることばだったのです。

救いが問題ではありません。この人も救われていました。土台の上に教会を建てたのですが、残念ながら、この人は管理者として誠実でなかったのです。間違った動機でメッセージをしていたのです。そのような建物は神の前に焼かれると言うのです。空しいと思いませんか？一生懸命努力して、自分の全人生をかけて教会のためにと働いて来たその働きのすべてが、主の前に一瞬にして煙となってしまうのです。何一つ見せるものはありません。働きにあつて、私たちはプレッシャーに負けることは簡単です。皆さんの目は気になるのです。願わくは、皆さんに喜ばれるメッセージをしたいと思うのです。願わくは、皆さんが「今日はよかった！」と言ってくださればよかったと思うのです。でも、実は、それは一切問題ではないのです。問題は神が語っていることを、私たちがこの講壇の後ろから、皆さんに正しく伝えているかどうかなのです。そのことが為されているときに、この土台の上に立つ建物は神の火に焼き尽くされずばらしい建物であるのです。

最初に言ったように、この箇所は個人的に非常に厳しいチャレンジを受ける箇所です。神の働き人として、教会のリーダーの一人として、私たちはこの教会を神に喜ばれるものとして建てなければいけません。皆さんには一つの責任があります。それは皆さんがここから語られるメッセージが「木や草やわら」でないことをしっかりと見届けることです。同時に、皆さんが霊的な赤子として留まり続けて、一切、この働きに手を貸すことをしないのではなく、成熟して行くゆえに、一人では出来ないこの働きを、次の世代へとこの働きを託して行くことが出来るように、自らこの働きに加わって行くことです。神はその恵みを皆さんに与えてくださっています。そして、その働きに進むように皆さんに求めておられます。心から願うことは、皆さんが私たちといっしょに教会を建て上げること、神に喜ばれる建物が建つように、この浜寺の地にあつて、浜寺聖書教会が神の栄光を燦然と輝かせるすばらしい教会となるように、しっかりとその土台に立って、すばらしい素材を用いて、神の正しいプロセスに沿って、いっしょに建て上げることです。そのような教会になつて行きたいと思ひます。皆さん、ぜひ、そのような教会にしてください。